
ドラゴン狂想曲番外編 平穏な日々

大蚊里伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン狂想曲番外編 平穏な日々

【Nコード】

N9663V

【作者名】

大蚊里伊織

【あらすじ】

惑星サンディエッグの作られたドラゴンを保護する仕事をするデイープは砂オオカミと、相棒であるファイアーを残し、温泉旅行に一人で出かける。そこで昔のことを思い出すデイープ。そこへ、仲間にならないかという男が来て……。

(前書き)

ドラゴン狂想曲の番外編です。よかったら読んでください。

その砂オオカミに出会ったのは、去年の暮だった。

ディープは、列車に揺られながらそう考える。少し一人旅がしたいからと仕事を休み、一泊の旅行に、相棒と砂オオカミの子供を家に残して家を出た。相棒はファイアーという赤髪の男だ。彼が患う人殺しフラッシュバックが夏場は自分でもなんとかできることもあり、たまには一人で旅に出たいというディープに、行ってきたよと言われたのだった。

ここは地球型惑星サンディエッグである。日曜日の卵と名付けられた星である。ここを見つけた船長が好きだった日曜日の卵という歌がもとになっていると言われている。

暑いな。とディープは思う。

ふだん四季のある場所に住んでいる今は夏だ。夏は暑く、冬は寒い。

列車での旅は、事前に宿の手配も済ませてあり、ただ行くだけだ。それでも、いつも心を覆っているなにかが静かにはがされていくと彼は思う。

二人の仕事は、この星を最初に見つけ、地球で異端とされた海賊のお抱え科学者たちが作った、模造恐竜、でもなかには火を吐くものもある、を退治することだった。これらは、サンディドラゴン、あるいは単にドラゴンと呼ばれる。まるでファンタジーの世界である。

あの日、森林の奥でドラゴンを見たという目撃証言のために二人は歩いていた。

「年末だったのに、なんでこんなことしてるんだろうね僕たち」

「仕方がないだろう」

相棒のぼやきに付き合いながらディープは歩いていた。

寒い日のことで、二人とも防寒着を着ていた。

そのときである。急に道が開けた。

二人の前に灰色の大きな生き物が姿を現した。砂オオカミと呼ばれる、砂漠地区によく出没する生き物だ。ディープは黙りこんだ。畏怖という単語が浮かんた。うしろからついてきたファイアーはわーと言う声を出した。

それは大きな犬のような生き物だった。もう少しいけば森林が切れて砂漠に近くなり、草原が広がっているはずだった。

「オマエタチガ」

頭に直接語りかけてきた。ファイアーは大きな犬！と叫んでいた。この声は俺にしか聞こえない。と、ディープは思った。

「サンディドラゴントヨブモノ」

「ああ」

小さく呟く。ファイアーは何か叫んでいて気付かない。

「アレラヲココカラタイジシテイルノダナ」

「そうだ」

砂オオカミは、この星の先住動物だ。頭がいいとは言われていた。「アレラガキテワレワレハコマツテイル。ワレノムスコヲツレテイケ」

大きなオオカミの後ろから、大型犬程度のサイズのオオカミが出てきた。

「わかった」

大きなオオカミは小さいほうを残して、去っていく。

「置いて行っちゃった」

「そうか」

「え、なに？」

「こいつを連れていく」

「え、飼っていいの？」

「ああ」

「わーい」

全く今のやりとりをわかっていない相棒の、ファイアーの背中を見ながら、ディープは声を受け取る。

「ヨロシクオネガイ……シマス。テンデス」

と。幼い少年のような声だ。

「名前なんてつけよう！」

「テン」

と、ディープは言う。

「テン！空って意味だね！」

「そうだ」

ブルーの瞳をもった砂オオカミの子供を預かって、ディープたちは仕事を続けている。

テンを仲間に加える前からディープはファイアーと仕事を組み、火事で焼け出されて彼のところへ転がりこみ、それから三年、一緒に暮らしている。一緒に住もうよと言われたとき、本当にありがたかった。

貯金はあったが、帰る家があることはディープを安定させた。顔に出すことはないけれど、ディープは感謝していた。

「ディープ」

「なんだ」

「今日は Pasta 食べたい」

「好きだな、Pasta」

「うん、大好き」

「いいぞ」

「わーい」

子供のように喜ぶ彼がうれしそうだと、食事を作るのも楽しかった。

食事を作るのは一人になってからずっとだ。最初はレシピの本を読んだりして作っていた。

家族がいたころのことを思い出して、豆のスープを作ったりもした。

泣きながら食べたスープは、温かった。母さん、父さん。もういない人のことを考えながら、食べた。

それから、涙を拭いて、自分の道を歩もうと思った。購わなければならぬ罪を背負ったことを、後悔はしないつもりだった。

まだゆっくりと列車は走っている。道のりの半分ほどきたところだと駅名を見て思う。もっと古い記憶がよみがえってくる。たかだか五年前のことだというのに、ずいぶん古い記憶のような気がする。

初めて人を殺したのは研究所でのことだ。思い出したくないが、浮かび上がってきた。ふうとため息をつく。

ディープはこの星で生まれた。地球で生まれたファイアーと違い、この星の貧民の暮らすところで育ち、研究所の狩りで捕まって両親と引き離された。

「お母さん」

「うちの子をどうするつもりです」

母の声が耳の奥に残っている。父は銃をつきつけられて黙っていた。

ディープの記憶はそのあとしばらくない。

気が付いたら研究所でエスパーとして飼われるようになっていた。実験体と呼ばれる、一般人を連れてきて行われた実験だった。ディープはとなりの部屋のガラス張りの部屋から、男の血液を沸騰させ、煮殺した。

男は熱いと転げ回り、絶命した。ディープは黙ってそれを見ていた。

「すばらしい」

所長が言った。対エスパ―装置のついた服を着こんでいるが、こいつを殺したいと思った。

両親は殺された。見えたのだ。能力を全開にして遠くまで人の気配を感じた日に。

まずこいつを殺そう。それから両親を殺した人間を殺そう。そう思った。

力がほしかった。大きな力が。エスパ―は意思を能力に変える力を持つ。大きな意思を持てばできるはずだ。と思った。こいつを殺したい。集中した。所長の身体がふくらみ始める。

「な、なんだ」

所長が、身体をまさぐる。

「同じ殺し方で殺す」

ディープはそう宣言する。

「だ、誰か、早く」

「無駄だ」

「あ、熱い、熱い、いやだ、死にたくない」

助け！ てくれまで言わせなかった。ほんと大きな音がして男は焦げ、しゅうしゅうと音がする。

異常に気付いた兵士が入ってくるが、ディープと焦げた男を見て躊躇する。

「邪魔をするな」

ディープはそう静かに言う。兵士の一人がごくりと喉を鳴らす音が聞こえた。

彼が歩き出すと、兵士は道をあける。廊下に出た。少女が立っていた。

「ミスティ」

「あなたの両親を殺したのは私よ」

少女はそう言った。

足元が、すきとおり、水に変わっていく。

正確に言えば水ではないが、電解質でできたそれに人が触れると、彼女の中に解かされてしまうのだ。

「私の養分になったのよ」

ディープは黙った。人と植物の融合を超能力を使い行う実験の被験者だ。

「殺して」

いつも殺してと言う少女。ディープはためらった。

「私が私のうちに！」

目をかっとひらいて、少女が大きく口をあけた。

ディープは反射的に空間を移動した。口から蒸気がたちのぼり、青い液体が吐きだされ、床をじゅうじゅうと焼いた。

ディープは少女の後ろに出現し、集中し、少女を沸騰させる。

「熱い、ありがとう、ディープ」

ずっと、温かい身体にもどることを切望していた少女を今殺したのだ、とディープは思う。

少女がぐらりと倒れ、しゅうしゅうと溶けていく。ディープは黙って廊下を歩き、建物を出た。

兵士が遠巻きに、車に乗り込む彼を見ていた。

車の運転の仕方などわからなかったが、透視してキーコントロールにアクセスし、解除。自動で動き出す。

後ろで建物が爆発した。

「ありがとうディープ」

複数の声が頭の中に響く。一緒に飼われていた仲間がそれぞれ暴動しているシーンが頭に表れた。

それきり、ディープに古い仲間は接触してこない。

ディープは街に行き、職業を搜した。

そしてジオット株式会社に就職した。ドラゴンを保護することを目的とした集団で、どこからかお金が出ていた。過去を問われない。

試験も実技だけだった。エスパーだということは隠して試験を受け、合格した。

列車が到着する。デンタルアという、温泉の町だ。

「お待ちしておりました」

車が迎えに来ていた。旧式の水素車だ。

乗り込んで、ホテルに着く。

「こちらです」

部屋に通されて、くつろぐ。さしてすることもなく、ただぼんやりする。

金はないわけではないが、贅沢はめったにしない。たまにはいいかと、のんびりしにきたというのに、頭の中は古い記憶でたくさんになっていた。

カーテンをあけると外が見えた。もう夜だ。

ガラスに映るディープの目と髪はつまっくろだ。

感情が湧きあがってくる。

「さみしい、か」

俺は寂しいのか。

ディープは呟いた。自覚してはいけないと目をそらせてきたことだ。たまに目をそらすことができず凝視してしまう。さみしいのだ。ファイアーも連れてくればよかったのだろうか。ふいにいつも能天気に行き来しているように見える相棒を思い出す。あれはあれで考えることはあるようだ。ずっと固形食糧ばかり食べていた彼は、ディープの作る食事にいたく感激し、それからあちこちでおいしいものを食べるようになった。

いわく。

「ディープのおかげであたらしい世界を知ったよ」
である。

ディープと一緒に新しいレストランができれば行くし、これ家で

も作れる？ とか聞いたりし、つい作ってしまい、レパートリーを増やしてきた。

その生活ももう三年半になる。

あの能天気も全部、彼らしい。

大浴場があるらしい。風呂に入るのも嫌いではない。ジャパニーズ形式と言う形式のホテルである。ホテルにも系列によっていろいろある。ディープは日系人の多い地区にいたせいか、お湯をたっぷり入れて風呂に入るのがわりと好きだ。ゆかたを持って部屋に鍵をかけ、廊下に出る。ふいに、足元の赤い絨毯が黒色に変色する。

「……」

「見つけた」

と声がした。真後ろだ。

ディープは動かない。

面倒は嫌いである。

「またお前か」

ディープがうんざりとした表情で言う。

年中表情をほとんど変えない彼をうんざりした表情にするという偉業を成し遂げた男が、影から飛び出す。ディープは振り返った。

「俺たちに協力してくれ」

「断る」

ディープは即答する。

「なんでだ」

「俺はもう人を殺したくない」

大体、やっと休みをとって休んで旅行に行こうと思えるようになったというのに、なぜこんなところで殺伐とした会話をせねばならないのか。

「俺たちは」

エスパーたちを集めて、新しい組織を作り、星を制圧するという計画なのだそうだ。初めて会ったディープに男は滔々とその話をした。

どうやら信じているらしい。そういう組織の正義を。

馬鹿じゃないかとディープは思った。

そして素晴らしい組織に入るのが彼のしあわせにもなると男は本気で思っているようだった。

小太りで、眼鏡をかけ、そばかすなのかニキビなのか肌が荒れた男だ。

気分が悪くなる。

「俺はお前たちが何をしようとかかわりたくない」
言いきって、向きを変える。

「俺たちの話を聞いてくれ」

「聞きたくないな、二度と現れるな」

「お願いだ」

「厭だ」

「なんでだ」

「仕事が好きだからだ」

「仕事？」

「仕事だ」

「仕事なんかより、我々と戦おう」

「厭だと言っているだろう」

言い争いはしたくないが、痛い目にあわせたほうがいいのだろうか。ディープは思う。味方にもなりたくないが、敵に回しても面倒だ。殺さずに痛めつけるのが苦手なのだ。

「俺は」

「なんだ」

「組織とかがキライなんだ」

「仕事は組織になってるんだろう、矛盾だ！」

「そういうところには頭が回るんだな」

ディープはあきれる。

他人に迷惑をかけていることはわからないというのに。

「お願いだ」

「だめだ」

「なんでこの俺が頼んでいるのに従わないんだ！」
本性が出てきたなとディープは思う。

「お前だろうと誰だろうと、俺はそんなところに入る気はない」

「そんなところだと」

「ああ」

じゃあ、俺はこれで、と去ろうとする。

「お前の相棒がどうなってもいいのか」

「……」

お前らの実力で勝てる相手じゃないぞ、ファイアーは。とディープは思う。薬で、銃弾より早く走ることができる能力を持つ、あの顔を思い出す。

ディープは振り返る。

「相棒はかわいいだろ」

「お前がなにを勘違いしてるのか知らないが」
ディープはため息をつく。

「馬鹿だな」

「なんだと」

俺は馬鹿じゃない、馬鹿と言われるのが一番嫌いなんだ。と男が言う。

男は腹を立てたようだ。

「あんたが気持ちを変えないなら考えがある」

どうせろくでもない考えだろう。

「あんたの相棒の家を仲間が囲んでいる。いっせいに攻撃したらどうなるかな」

「お前たちでは無理だ」

ファイアーの家はディープクラスのエスパーでもなかなか攻略できない対エスパー対策をほどこしてある。なぜそんなところに住んでいるのかと言うと、古い家を借りたらたまたまついていたとファイアーは言っていた。で、中年の大家に聞いたのだが、なんとも不

明瞭な答えが返ってきた。大家の祖母がつけたのだそうだ。エスパ
ーが来るから、と。大金を払ってつけたらしい。で、その祖母が亡
くなり、建物が古くなったので、誰も住まなくなり、ファイアーが
借りた。

「なんだと」

「試しにやってみればいいだろう」

と言いつつ、その場を離れようと歩き出す。

「待て」

「まだなにかあるのか」

「お前が殺したんだろう」

「誰を？」

「サンディエッグ最大の研究所の所長ワールズを」

「……、だったらどうしたというんだ」

「あの研究所にいたやつもいるんだ」

「そうか」

「仲間だったんじゃないのか」

デ IPP は黙った。

「仲間ならな、今がしあわせな仲間を呼ぶようなことはしない。仲
間じゃない」

答えた。

「お前は、今のエスパーたちの現状が分かっていないのか」

「別に興味はない」

ちゃんと仕事して、お金をもらって生活することができるよう
なれば、それが一番幸せなことだ。

デ IPP は、そう思う。いや、思うようになった。

そういった就職ができないわけじゃない。サンディエッグには、
仕事ならたくさんある。

「冷血動物だな」

男がそう見下すように言う。

「そう思うなら思えばいい」

ディープは言う。

こいつらが所属するのはテロリストグループでもあることを突き止めていた。もし今、このホテルの従業員を盾にとられたらと思うたが、男はそこには考えが及ばないようだ。

「気が変わるようにしむけてやるよ」

「変わらない」

男がの表情が変わる。

「これでもか」

ばちん、と音がして、目の前に大きな水たまりができる。

ディープの目にその水たまりから何かが出てくるのが見える。

ディープ。

声がした。沢山のディープ、という呼びかけ。

「タスケテディープ」

テンの声と姿が出てくる。

「助けてディープ」

ファイアーがそんなこと言うものか。

「あなただけが頼りなのよ」

母さんを愚弄する気か。

「殺して」

……、ミスティ。

頭を振る。

過去のことなどもうたくさんだ。

接続してきた意識をぶった切った。

「うあ」

男の声がして、水たまりが消える。

「その程度で俺をどこまでできると思うな」

「……覚えてろよ」

ディープはふたたびくるるときびすを返し歩き出す。やはり面倒なことになってしまったようだ。と思うが、表情を変えない。

男の気配が消えた。

風呂までのエレベーターに乗り込んだ。手首に巻いた赤いリストバンドをはずし、耳にあてる。

「なに？　ディープ」

ファイアーの声だ。

「いや、なんでもない、なにかあったか」

「特に言うほどのことはないよ」

「そうか、ならいい」

通信を終わらせる。

ほそいリストバンドをまた手首に巻いた。

風呂からあがり、部屋に戻る。夕食はレストランなので、向かう。着物の女の人が案内してくれる。

日本食である。

ディープは箸もきちんと使えるので、箸を使う。

「だしがいいな」

静かにそう呟く。

静かで少しうすぐらいくらいのレストランだ。

料理が運ばれてくる。

少しずつ運ばれてくるのは懷石料理とかいうやつだろうか。

「これは、一回作ってみるか」

茶碗蒸しだな、と呟く。

料理の中身を味わいながら、調味料になにが入っているのか、しっかりとチェックする。

たんにおいしいとだけしかわからない料理もあるが、ディープはたいがい何が材料なのかわかる。食べたことのある材料は、という但し書きつきだが、高い材料でなくても、おいしいものは作れるのだ、とも思う。

材料をひきたててやさしい味に仕上げるきちんとした日本食は初

めて食べたが、上品に使われただしの味に感動すら覚える。

砂糖が多いな、と思う。砂糖が多めなのは、なんでも、日本という国が砂糖が貴重だった時代に、甘いのはごちそうだと思っていた時期があるからだそうだ。

本当かどうかは知らない。

食べ終わって、部屋に戻り、ベッドに入った。

静かに集中する。遠くへ遠くへと。いつもではないが、時々ファイアーの意識を捜してしまう。安心するのだ。

今日はそばにいない相棒の気配を捜して遠くまで意識を広げる。

まさかとは思うが、心配にはなったのだ。

住んでいるタウンに意識が届く。対エスパー対策をどこされた家だ。入り方を知らない、攻撃される。ディープは隙間を捜し、するりと精神を中に滑り込ませた。

玄関を抜け、部屋に入る。

深夜のテレビを見ながら、ファイアーがなにかスナック菓子を食べている。ふだん、ディープがあまりいい顔をしないので食べないのだが、買い食いたらしい。

夜も、仕事に差し支えるから夜中まで起きているのはやめろと言っている、のびのびとしている。

「テンちゃん、ディープには内緒だよ」

もちろん、ファイアーにはテンとディープが会話できることは知らせてない。

「テレビおもしろーい」

録画して昼間見てもこういうのって面白くないんだよねー。

などと言っている。

ディープはテレビがキレイなので、テレビはファイアーの部屋にしか置いていない。

ファイアーはふだんはヘッドホンをしている。夜中に廊下に出ると部屋に電気がついていて、食い入るように見ていたりするのを、ヘッドホンをはずして、「いい加減にしろ」と言って怒ったこ

ともある。

仕事は、危険な仕事だ。できるだけ体力を温存してほしい。と思うしなにかあれば迷惑があちこちにかかることを諭すこともあるのだが、でも、見たいんだもん。と言われてしまうと、やれやれと思ってしまう。

今日だけだぞ。と、ディープは思っ、家を離れる。

ファイアーがきよろきよろするのが見えた。

「え、今ディープの声しなかった？」

聞こえたか、と思いつつディープの意識はホテルのベッドへと戻ってきた。

「眠るか」

少し心配だったのだが、大丈夫そうだと判断する。敵もいなかった。ただのおどしだったんだと判断する。すうっと眠りについた。

我が家に着いたのは夕方だった。

「おかえり」

「ああ。ただいま」

家につくとファイアーがいて、テンがいる。

「土産は？」

「佃煮だ」

「佃煮？」

「日本の保存食だ」

「おいしいの？」

「俺は好きだが」

そうなのーと言いつつ、テンと戯れている。

「なんか変わったこととかなかったの」

「特にないな」

ディープは答えた。

「そうかあ、平穩な旅行でよかったね」

「まあな」

「お風呂とかよかったんでしょ」

「ああ」

「いいなあ、今度僕も一緒に行こうかな」

「テンの世話はどうする」

「犬飼ってる同僚に来てもらう」

「なるほど」

「ペットホテルつてのもあるし、犬と一緒に泊まれるホテルとかなら」

「そうだな」

「いない間にいろいろ調べたんだよ」

「そうか」

ファイアーはにこにこしている。

「なにかいいことあったのか」

「特には」

「そうか」

「でも、昼間お客さんが来て、警察呼んじやった」

「お客さん？」

「うん、なんか薬で簡単になれる違法エスパーだったみたい。何人もいたから全員縛って渡しちゃった」

「そうか」

「でも大したことないよー」

夜見たとき誰もいなかったのはそういうことだったようだ。

天気の話題のようにそう話してからファイアーは言う。

「じゃあ、夕食食べよう、ディープ、なんか作って！」

「そうだな」

日常に戻っていく。もっと旅行の話聞かせてよ！ ごはんの話とか！ と言われながら、ディープはごはんのしたくを始めた。

(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9663v/>

ドラゴン狂想曲番外編 平穏な日々

2011年8月21日03時30分発行